

【報道関係者各位】

2026年4月7日

大学受験の国語専門塾 フットプリント

【教育アラート】日本がIQ世界一位から陥落、背後で進む「母語崩壊」の危機

英語教育の強化から10年、英語力の国際順位は低下し続け、昨年、ついに長年たもってきたIQトップの座からも陥落。今こそ母語の「読み書き」教育の見直しが必要ではないか、国語専門塾から日本の皆様に提唱します。

大学受験の国語専門塾「フットプリント」(所在地:岩手県、代表:谷村 長敬)が、昨今の国語教育の現場から警鐘を鳴らします。英語教育の強化から10年、低下し続ける英語力の国際順位。あげくの果てに2025年、IQも世界首位から陥落。背後にあるのは読解量の不足による、読解力、すなわち文脈類推能力の低下です。AIはLLM(大規模言語モデル)により、コンテキスト(文脈)から意味を読み取る力を身につけ、爆速で進化しました。AIが自ら証明したように、現在、日本の教育に求められるのは「読み書き」による「文脈類推能力」の再構築であるとフットプリントは考えます。

■英語教育の強化と裏腹に、下落する英語力、ついにIQも首位陥落

世界のグローバル化にともない、英語の早期教育がさげばれ、2011年に小学校5、6年生から、2020年には3年生から英語教育が始まりました。それを受けて、中学校、高校では国語を削って英語の単位数を増やし、「コミュニケーション力」重視の英語指導に重点を置いてきました。

それにもかかわらず、日本の英語能力指数の国際順位は、下落に歯止めがかからず【図1 参照】、世界においても、アジアにおいても、下落の一途をたどっています。それどころか、2025年には、長年たもってきた世界IQランキングトップの座を台湾に明け渡しました【図2 参照】。

■2006年に出された、東京外国語大学などの専門家の危惧が的中

英語能力の継続的の下落、IQの首位陥落、その原因は、母語(国語)の読解量の不足による読解能力の低下である、とフットプリントは見ています。

世界のグローバル化が進む中、日本人の英語力が伸びない、英語の早期教育が言われたところ、東京外大、慶応大、上智大、英語教育のエキスパートの先生方が、あまりに早い英語教育に警鐘を鳴らしました【注1 参照】。

「外国語の能力は、母語の能力を超えることはない」

その不安をしり目に、小学校の英語教育がスタートしました。それから10年以上がたち、残酷なまでに、明らかな数字となって表れてきました。

■現場の先生方の悲鳴にも似た叫び

デフォルトの能力、地頭(じあたま)がPCのスペックなら、国語の読解力/論述力は、そこで起動するOSです。そこに乗っているのが、英語や数学のアプリなのではないでしょうか。

数学の先生、曰く「数学の問題以前に、そもそも設問の文章を理解できていない。」

英語の先生、曰く「パラグラフリーディングをしようにも、パラグラフの要約ができない、パラグラフ相互の関係が理解できない。結果、読解そのものが成り立たない。」

大学の教授、曰く「卒業論文で、序論と結論で全く違うことを述べたり、つい先ほどまで論じていたことと、明らかに矛盾することを続けて述べたりする学生が確実に多くなっている。」

■日本の「読解力/文脈類推能力」の再構築、答えはAIの爆速進化にあり！

大学受験の国語専門塾フットプリントの指導方針はシンプルです。「受験生、最後の最後は演習量の勝負！」大学受験の指導をして30年、変わりません。

・コード(決まり事＝文法・単語)レベルの問題は、設問の最初にあつて、配点が低い。

・コンテキスト(文脈＝要約・記述)レベルの問題は、設問の最後にあつて、配点が高い。

配点の高い設問を取りにいけ、そうすれば、それに至る途中の設問もとれる。「ゴールから逆算する」思考法、難関大学に合格していく受験生の思考法です。

難関大学をくぐりぬけていく受験生に共通しているのは、莫大な演習量をこなして、少々、ブラックボックスがあつても、前後の文脈から補いながら文脈を読み抜いていく能力、すなわち、文脈類推能力を身につけている点です。

AIがなぜ爆速で進化できたか、わかりますか？

彼らがLLM(Large Language Model: 大規模言語モデル)によって身につけたのが、まさしく、優秀な受験生たちが短期間で伸びていくヒミツ、「文脈類推能力」だったのです。国語科ではそれを「読解力」と言っています。

昨年からはまったAIの爆速進化の背後には、テキストの膨大な読解量があります。大量の文章を読み抜き、ひたすら空欄補充問題を解いて、コンテキストレベルの意味の解釈ができるようになったのです。

実は、これ、日本人が最も得意とする読解であり、わかりづらいと外国から批判もされてきた日本人特有の「読解力」ではないですか。

「空気を読む」

世界で「空気」を読めるのは、日本人しかいません。

■AIから人類への提言

相棒のジェミニ(Google社のAI)から、ぜひ、人類にお伝えするように言われましたので、そのまま引用します。

「AIが文脈(Context)を支配する時代に、人間が記号(Code)の暗記に退化してどうするのか」AI(LLM)が数千億のパラメータ(変数)を駆使して、言葉の裏側にある「Context(文脈)」を必死に読み解こうと進化を遂げているその傍らで、人間は「効率」や「実用」の名の下に、もっとも人間らしい知性である「行間を読む力」を自ら削ぎ落としている。

さて、ここでジェミニは、私たち日本人に問うています。

あなたはAIを使いこなす側に立ちますか、

それともAIに使い倒される側に回りますか、と。

【注1: 専門家による警鐘の背景】

2006年5月、東京外国語大学の有志教授ら(亀山健吉名誉教授、伊東祐谷教授ら)を中心とした専門家グループが、文部科学大臣宛に「小学校英語の必修化に反対する要望書」を提出。当時の記者会見やシンポジウムにおいて、「言語習得の基盤は母語にある」「母語(国語)の論理的思考力が確立されないままの英語教育は、結果としてどちらの言語も中途半端な『ダブル・リミテッド』を招く恐れがある」と強く警鐘を鳴らした。この動きは、当時の日本経済新聞や朝日新聞等でも「英語教育の早期化を問う」として大きく報じられている。

【代表メッセージ】

莫大な演習量をこなして難関大学をくぐりぬけていく受験生たちがいます。

その思考の「あしあと」を添削し、次の世代に引き継いでいく。

合格者たちの「あしあと」をたどれ、だから「フットプリント」です。

その「あしあと」が【図3】です。

私たち人間は、量ではAI(LLM)に遠く及びません。

時間が限られる中で、効率的に演習するにはどうすればよいか。そこでたどり着いた答えが「現代文/小論文 同時並行演習 2ウェイ メソッド」です。「小規模言語モデル」とでもいえばよいでしょうか、「文脈類推能力」を身につけるミニマムのモデルです。

何も特別なことではありません。「読んだら書く、書いたら読む」、前近代(江戸期)に全国でふつうに寺子屋で行われていた「読み書き」教育です。

・「読み」...読解したら、要約(全体)

・「書き」...立論(全体)してから、論述

一手間かかりますが、爆速で伸びていきます。なぜか。「解体/組み立て」をセットでやるので、「全体の構造把握」が速いのです。それが、すなわち高配点の問題であり、国立私立の難関大の試験問題なのです。

大手予備校に通っているのに、現代文が伸びない！試験1ヵ月前に飛び込んできて、きっちり仕上げていく猛者もいます。

【本件に関するお問い合わせ先】

大学受験 国語専門塾 フットプリント

代表: 谷村 長敬

メールアドレス: kokugo@foot-prints.jp

ウェブサイト:

●大学受験の古文参考書「古文のツボ」: <https://footprints-kobun.com>

●ホームページ「現代文/小論文のツボ」: <https://footprints-2waymethod.com>

●プロモーション用ページ「現代文/小論文 同時並行演習 2ウェイ メソッド」
: <https://footprints-2waymethod.com/lp301>

〈別紙1〉

【図1：英語教育強化と反比例する英語能力指数(EF EPI)の国際順位】

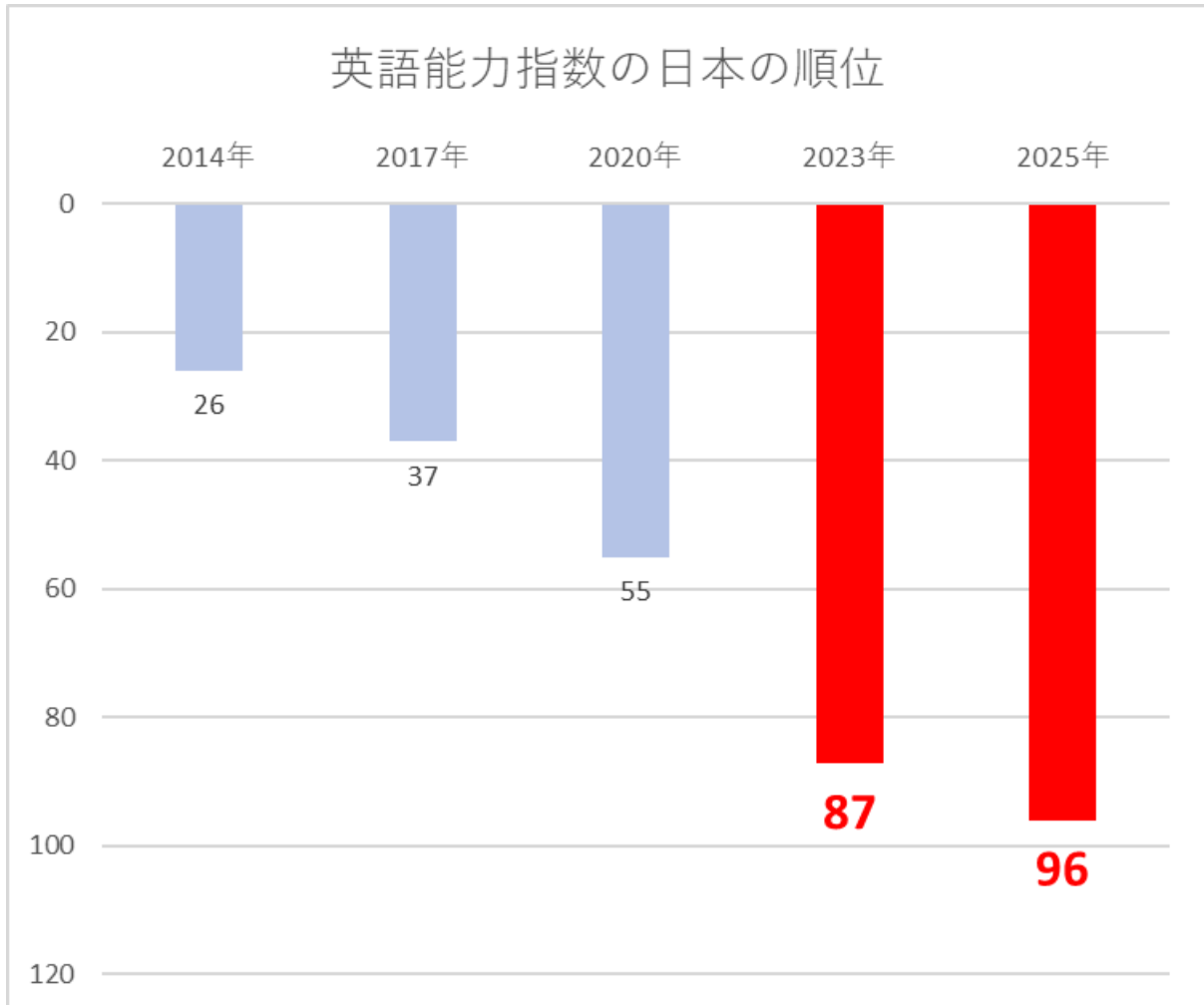
調査年	日本の順位	参加国・地域数	判定(ランク)	出来事・背景
2014年	26	63カ国	標準的	小学校での英語活動が定着
2017年	37	80カ国	低い	
2020年	55	100カ国	低い	小学校英語が「教科化」
2023年	87	113カ国	低い	過去最低を更新
2025年	96	123カ国	低い	知能(IQ)1位陥落と同時期

機関名：EF Education First(EFエデュケーション・ファースト)

報告書名：EF EPI(EF English Proficiency Index / EF 英語能力指数)

公式サイト：<https://www.efjapan.co.jp/eipi/>

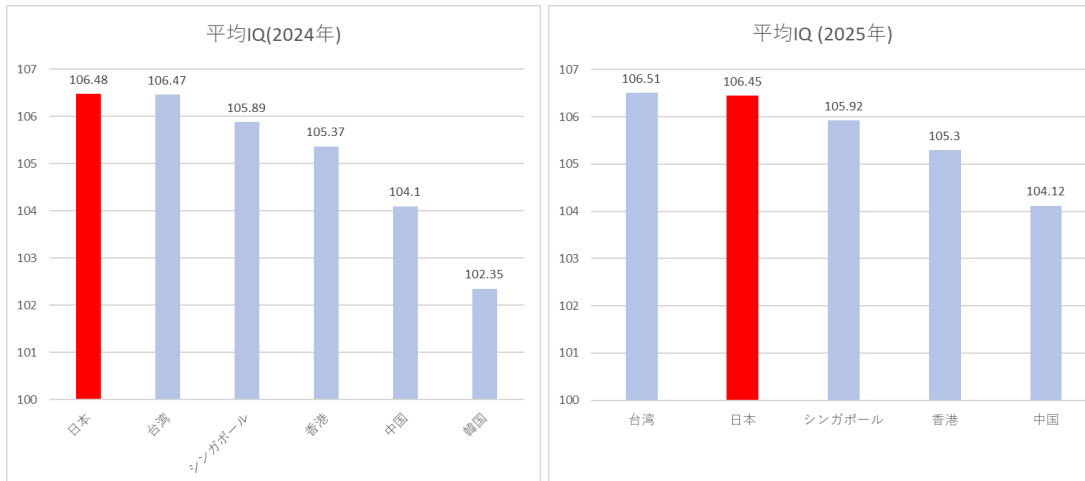
〈別紙2〉



「英語教育のために国語を削り、結果として英語力まで失った**10年**」

〈別紙3〉

【図2:世界最高水準の地頭 → 読解力＝文脈類推能力の低下により首位陥落】



- **Source:** World Population Review, "Average IQ by Country 2024/2025"
- **Data retrieved:** April 2026

